

## 古文 読解問題 「大鏡」三船の才」①

一年、入道殿の大井川に逍遙せ<sup>(a)</sup>させ給ひしに、作文の船、管絃の船、和歌の船と分かたせ給ひて、その道にたへたる人々を乗せさせ給ひしに、この大納言の<sup>(b)</sup>参り給へるを、入道殿、「<sup>①</sup>かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。」とのたまはすれば、「和歌の船に乗り<sup>(c)</sup>侍らむ。」とのたまひて、詠み給へるぞかし、

② 小倉山風の風の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき

申し受け給へるかひありて、あそばしたりな。御自らものたまふなるは、「<sup>③</sup>作文のにぞ乗るべかりける。さてかばかりの詩をつくりたらしましかば、名の上がらむこともまさりなまし。口惜しかりけるわざかな。さても、殿の、『いづれにかと思ふ。』と<sup>(d)</sup>のたまはせしになむ、我ながら心おごりせられし。」とのたまふなる。一事の優るだにあるに、かくいづれの道も抜け出で<sup>(e)</sup>給ひけむは、いにしへも侍らぬことなり。

問一、次の文章は『大鏡』について説明したものである。空欄(一)～(四)の中に入る言葉を答えなさい。

『大鏡』は(一)時代に書かれたとされる(二)物語である。文徳天皇から後一条天皇までの十四人の天皇が在位した期間の歴史を、(三)と(四)が対話し、それを若侍が批評するという形式で書かれている。

問二、傍線部(a)～(e)の敬語の種類と敬意の方向(誰から誰への敬意か)を答えなさい。

問三、傍線部①「かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。」を現代語訳しなさい。

問四、傍線部②「小倉山風の風の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき」の和歌についての次の問題に答えなさい。

(一) この句に使われている修辞法を次の選択肢からすべて選びなさい。

ア. 枕詞    イ. 序詞    ウ. 掛詞    エ. 縁語    オ. 押韻    カ. 本歌取り

(二) この句の解釈として最も適切なものを次の選択肢から選びなさい。

- ア. 山風に散る紅葉が人々の衣に降りかかり、まるで美しい錦の着物のように見える様子を表している
- イ. 秋の寒さのため、人々が実際に錦の着物を着て外出することが多くなった状況を表している
- ウ. 錦の着物を着ていない者はいないほど、貴族たちが華やかな服装を着てることを表している
- エ. 錦の衣をまとったように山全体が紅葉によって色づき、彩られている様子を表している

問五、傍線部③「作文のにぞ乗るべかりける」とあるが、なぜ大納言はそう思ったのか答えなさい。

## 解問題 「大鏡」三船の才」① 解答・解説

問一. (一) 平安 (二) 歴史 (三) 大宅世継 (四) 夏山繁樹 ※ (三) (四) は順不同

問二. (a) 尊敬語 筆者から入道殿への敬意

(b) 謙讓語 筆者から入道殿への敬意

(c) 丁寧語 大納言から入道殿への敬意

(d) 尊敬語 筆者から入道殿への敬意

(e) 尊敬語 作者から大納言への敬意

問三. あの大納言は、どの船にお乗りになるのだろうか

問四. (一) ウ

(二) ア

問五. 詠んだ和歌のように素晴らしい漢詩を作っていたら、和歌以上に名声が得られたから